

# メスティサへと多文化主義のはざままで —エクアドルにおける先住民の包摂と排除—

新木 秀和

## はじめに

ラテンアメリカ諸国においては、19世紀の共和国形成以降、とりわけ20世紀半ば以降、「メスティサへ (mestizaje)」という混血のイデオロギーが国民統合の手段として大きな影響力を及ぼしてきた。メスティサへという概念は、植民地時代に由来する人種・民族面の「混血状況」を説明し、先住民と白人の「混血者 (メスティソ mestizo)」の存在を浮かび上がらせる<sup>(注1)</sup>。同時に、単一かつ均質化した「国民文化」=「混血文化」の論理に根拠を与え、「国民統合」の原理として濃厚な政治性を帯びてきた。

なかでも1920年代のメキシコにおけるバスコンセロスの混血国家論は、その後に多くのラテンアメリカ諸国がメスティソを主体とする社会モデルを国家イデオロギーとする前例となった。同様の状況は20世紀半ば以降のエクアドルにもあてはまり、メスティサへをめぐる問題は、ナショナル・アイデンティティや国民統合をめぐる問題として大きな位置を占めてきた。ここでは、メスティソが国家や国民の主流とされる一方で、先住民などのマイノリティの存在が周縁化される状況が生じてきた。

以上のような問題意識を背景とする本稿の課題は、先住民運動の活発化が顕著となるエクアドルの現代社会において、メスティサへから多文化主義への移行にどのような状況が見られるのか、その中で先住民の可視化が包摂と排除の力学にいかにつまみ取られているのか、といった課題について検討することにある。社会における混血状況を議論するには当然ながらアフロ系住民 (アフロ系エクアドル) に目を向けるべきであろうが<sup>(注2)</sup>、本稿では主に先住民に焦点を当て、必要に応じてアフロ系に言及する<sup>(注3)</sup>。

本稿の構成は次のとおりである。第1節では、先住民運動に先立つ形で、20世紀半ば以降に明確になってきた混血国家思想の輪郭を素描し、エクアドル社会におけるメスティサへの位置を明らかにする。第2節では、1990年の全国蜂起に前後して先住民運動が形成・展開する過程を跡づけ、それと関連づけながら混血社会における先住民の可視化および市民権模索の意味を検討する。第3節では、1998年および2008年の憲法改正を通じた多民族性・多文化性の公的承認の過程と意味を検討する。また第4節では、2001年および2010年に実施された人口センサスを手がかりに、多文化社会における先住民の可視化とメスティサへの影響力を関連づけ、国家の多元性が謳われる一方で先住民の包摂と排除の過程が同時進行している逆説的な状況を明らかにする。そして第5節では、均質な集団と従来想定されてきたメスティソの内部にも多様化の動きがあり、もうひとつの民族意識の創生が進行している状況を指摘して、多文化主義をめぐる新たな方向性を示唆したい。

## 1. メスティソ国家の形成と先住民

### 1) 国家イデオロギーとしてのメスティサヘ

まず、メスティサヘが国家イデオロギーおよび国民統合の手段となる背景を明らかにするため、19世紀の共和国成立から20世紀にかけての歴史過程において、国家と先住民の関係を中心に、エクアドルにおける国民統合と人種・民族関係の経緯を概観しておく。

スペイン植民地期に導入された「先住民税」<sup>(注4)</sup>は、植民地当局が先住民共同体を統治する手段であった。それは先住民というカテゴリーを公的・法的に定めることで、先住民アイデンティティの境界を定める機能をはたしていた(Ibarra2008, p. 13, Guerrero2000, pp. 93–96)。そして、1830年のエクアドル共和国成立を経た19世紀前半でも、先住民税による先住民という規定は同様の役割を担っていた。しかし、1857年に先住民税が廃止されると、先住民というアイデンティティが立脚する法的基盤がなくなって失われることになった(Ibarra2008, p. 12, Guerrero2000, pp. 93–96)。

共和国の初期(1830–1857年)には、国家が直接的に、課税対象として先住民を統治していたが、次の時期(1857年–20世紀半ば)には、先住民統治は地方権力の手任せられるようになった。その後、19世紀末の自由主義革命(1895年)を境に、「文明化しなければならない消極的な先住民」というイメージが生み出され、こうして先住民は「声なき民」、「見えざる存在」へと押し込められた。このためかえて、先住民というカテゴリーを取り巻く境界が緩やかになったことで、エメスティソ化の過程が促進されることにもなる。

1920年代以降、メスティサへの思想はラテンアメリカ全体に浸透し始める。その代表的人物がメキシコの初代公教育大臣ホセ・バスコンセロスである。彼は著作『宇宙的人種』(La raza cósmica, 1925年)において、西欧的な白人中心の人種主義を批判することで人種混合を肯定し、ラテンアメリカに「宇宙的人種」が誕生すると述べる。その主張は当時のエリートにありがちな神秘的優生学で、新しい混血種の誕生を称揚しつつも、白人種が中心となって、先住民が接木され、黒人は消滅するとした。革命後のメキシコでは20世紀前半に、メスティソこそがメキシコ人だという考え方がナショナリズムと密接に結びついて支配的となったため、先住民に対しメスティソ文化への統合・同化が強要され、先住民が固有の文化・伝統を維持することを困難にしてきた。こうしたバスコンセロスのメッセージやメキシコの状況は、他のスペイン語圏にも大きな影響を与えたのである<sup>(注5)</sup>。

1920年代以降にラテンアメリカ諸国で強まったメスティサヘという概念は、エクアドルにおいてもやがて、国民統合の手段として機能することになる。インディヘニスマ(先住民擁護運動)の思想家たちも、先住民のメスティソ化という意味でのメスティサヘ(先住民の文化変容)を推奨した。こうして20世紀の半ばには、メスティサヘは国家的・国民的な言説として浸透し、ナショナル・アイデンティティへの接合が強まっていった。

メスティサヘ国家の成立は20世紀半ばを挟む期間だとみられている。1944年のエクアドル文化会館設立を経て、知識人たちは、エクアドル性(ecuatorianidad)の追求を行なうなかで、国家アイデンティティとしてメスティサヘを盛んに主張するようになった(Polo Bonilla, 2002, pp. 15, 89–92)。

そして、1970年代はエクアドルにおいてイデオロギーとしてのメスティサヘが制度化された時であった(Silva 1995, p.17)。1972年9月、改革主義的軍政の担い手となるロドゲリス＝ララ大統領は、ある演説において、スペイン人と先住民とアフリカ系住民からなる国民統合に言及したうえで、エクアドル人全体にとっての先住民の祖先を称揚しつつも、「先住民に関わる問題はもはやなくなった。…われわれすべては国民文化の目標を受け入れる時に、白人になるのだ」と述べた(Silva 1995, p. 17, Roitman2009, pp. 102–103, 大貫 1984, pp. 306–307)。またそれゆえ、「同時代の文化的・社会的動態

は、主として、支配的な同質的中心への従属的・周縁的異質性の文化変容および同化の問題となった」(Stutzman 1981, p. 49) のである。そこには、次に見るように「白色化」の思想が姿を現していた。

## 2) 先住民の「白色化」：メスティサへにおける不可視の先住民

メスティサへの考え方は、先住民および先住民文化が白人や西欧文化に同化していく過程として構想されていた。そこから、先住民の「白色化」(blanqueamiento) という概念が生じてきた。すなわち、白人が先住民化するのではなく、民族文化的に白色化すべきなのは先住民の方なのであった。実際、国民統合論としてのメスティサへは、先住民や黒人を白人化することを意味しており、その過程が先住民などの「文化変容」なのである。

このような国家や社会との関係で、先住民をめぐるイメージが形成され、固定化してきた。アンドレス・ゲレロは、操り人形のイメージを用いて「操作される先住民」という先住民像を提起した(Guerrero1994)。すなわち、あくまでも客体として声をもたない存在とされたのである。そればかりか、先住民は容易に洗脳や動員の対象となる「操作される」存在でしかないと思なされて、主体性は剥奪されていた。そのため、後述するように、1990年の全国蜂起を境に先住民の政治運動が国政に基盤を固めるまで、エクアドル社会において先住民は「見えざる存在」に他ならなかった。この状況が民族差別や貧困という劣悪な状況の固定化につながってきたことはいうまでもない(De la Torre 1996)。

また同時に、エクアドルにおけるメスティサへは、白人と先住民の混血を意味する傾向が強く、アフロ系の存在を排除する傾向を強くもった(Roitman, 2009, p.109)。したがって、先住民が不可視の存在になったとすれば、最近まで、アフロ系には、より強い不可視性が付与されてきたといえる<sup>(注6)</sup>。「すべてを抱摂する排除の論理」(Stutzman1981)として機能してきたメスティサへのもと、白人メスティソによる支配文化を受け入れて「白色化」しなければ、先住民や黒人は「国民」の枠から排除されてしまうのであった。

繰り返しになるが、ラテンアメリカのメスティサへ(文化の混交、混血の文化)は異種混交性のメタファーといえる。実際、メスティサへとは、複数の民族集団が「融合」という形で互いを含み合うことを意味する。混血者メスティソから派生した用語がメスティサへであり、メスティサへは文化の「混血性」を表す用語としても使われてきた。また、メスティソは本来、先住民と白人の混血者を指すが、混血者全般をも意味することもある。

換言すればメスティサへとは、2つ以上の「純粋な」人種民族(とその文化)が融合して、別の新しい人種民族(と文化)が誕生することを含意する。すなわち、複数のオリジナルな要素が融合して、ホミ・バーバ流の「第三の空間」(the third space) = 新しいハイブリッドな形式が創造されるのである(Roitman, 2009, p. 56)<sup>(注7)</sup>。このようなハイブリッド性(混成性)としてのメスティサへは、国民国家における多様性を許容するのではなく、むしろ複数文化・複数民族の同質化を促す力となり、そうした特徴が批判の対象となってきた(Roitman, 2009, p. 57)。こうして、メスティサへを通じて形成された「メスティソ国家」の屋台骨やその人種民族関係は、社会変化の動因がエクアドル内外に生まれる20世紀末まで変化することはできなかった。その変化を促す契機となったのは、とりわけ先住民の政治的組織化であり、また国家による上からの多文化主義的政策であった。

## 2. 先住民運動と先住民の可視化

### 1) 先住民の組織化・蜂起と先住民運動の展開

メスティサへという形で国民統合のイデオロギーが定着する過程は、先住民の組織や運動が徐々に形をとっていく過程と軌を一にしていた。

先住民の政治的組織化は20世紀半ばにさかのぼる<sup>(注8)</sup>。先住民の組織化や先住民アイデンティティの政治化が生じた背景として、1960年代以降、とくに1964年と74年に農地改革が実施されてから、アンデス高地部の農村教区で生じた権力関係の変動があった。これにともなう農業部門の近代化により、地方権力（地主、司祭、政治ボスなど）の間における結節軸が解体され、白人メスティソによる支配構造が変化を余儀なくされていく。同時に開発プロジェクトをたずさえて国家が介入するようになる。その結果、強力に階層化されていた従来の民族統治の絆が緩み出し、同時に、それまで各々の土地で孤立していた様々な先住民集団の間に接触の機会が生まれた。先住民の管理が公的機関から民間の手に移行し、アンドレス・ゲレロが「民族統治の解体」(desintegración de la administración étnica)と呼ぶ状況が生じた(Guerrero2000, pp. 91-112)。この過程により、いくつもの新しい組織（共同組合、連合など）が生み落とされ、これらの組織が、変動で生じた権力の空白を埋め、やがて民族的な復権を模索するようになる。

こうした状況の変化が、1970年代から1980年代にかけて様々な先住民組織の設立につながった。アンデス高地部のECUARUNARI（1972年設立）、アマゾン地域のCONFENIAE（エクアドル・アマゾン先住民連盟、1980年設立）、および海岸部のCOICE、である。1980年には調整機関としてCONACNIE（エクアドル先住民全国調整会議）が設けられ、各地域に基盤をもつ3つの地域組織、とくにECUARUNARIとCONFENIAEの2つが勢力を結集し、1986年に全国組織のCONAIE（エクアドル先住民連盟）を結成した。CONAIEは先住民の約7割をたばねる国内最大の全国組織であり、その組織力はラテンアメリカでも際立つ<sup>(注9)</sup>。

先住民組織はとくに地域レベルで政治に関与し始めていたが、CONAIE結成を契機として全国的にも発展していった。同時に国際的なネットワークを広げ、連帯先や資金提供源として欧米の公的機関やNGOとの関係を深め、米州各地の先住民組織との連携を強める。先住民問題の国際化や、人権や環境に関わる国際NGOとの連携強化を通じて、グローバルな連携の中で活動を推進する基盤がつくられた。

1990年6月の先住民による全国蜂起を境に、CONAIEは一連の抗議行動や中央政府との直接交渉を繰り返していく。CONAIEの要求は、法政治的、農業的、経済的、かつ文化的な要求である『先住民運動の16項目』に具体化された。その内容は、エクアドルが多民族国家であるという宣言、土地の譲渡と諸民族の生活領域の合法化、農業問題の解決、先住民医薬の公認、二言語教育への資金提供などであった(Moreno Yáñez y Figueroa1992, pp. 65-66, 94)。

1990年代を通じてCONAIEは政治動員や対政府交渉の経験を蓄積させ、他の社会勢力や社会運動と共有できる目標として、新たな国家モデル、とりわけ多民族国家の構築という目標を掲げ、1994年にはそれを独自の政治プロジェクトとして公表した。このように先住民運動の射程は、エクアドルという国家と社会のあり方を問題にすることになる。

これに先立ちCONAIEは、1993年頃から選挙戦略を採用する。その延長として、総選挙の1996年には、市民勢力を代表する新政党と連携し、パチャクティク新国家多民族連合運動(MUPP-NP)を結成した。これは先住民だけでなく、社会運動なども参集する運動体である<sup>(注10)</sup>。その結果、ルイス・マカスなど数人の国会議員、70名以上の地方首長や地方議員を誕生させ、政治勢力としての地位を確立した。

先住民運動をめぐるその後の展開は劇的であった<sup>(注11)</sup>。

2000年1月に発生しマワ政権を打倒した軍民によるクーデタ事件は、先住民運動の存在と力を強く印象づける出来事となった。この政変では、先住民蜂起に発する社会運動各派の抗議行動に一部の軍人が加わることで三権機関（最高裁判所、国会、および大統領府）の占拠につながり、マワを失脚させた。しかし、代わって樹立された軍民三者（メンドサ将軍、バルガス CONAIE 代表、ソロルサノ元最高裁長官）による救国評議会は、米州機構や米国政府などからの国際的非難を背景に、メンドサ将軍が離脱

することで短命に終わり、ノボア副大統領の大統領昇格という形で政権の委譲がなされた。

先住民運動は、2000年の政変におけるマワ追放劇で力を発揮しただけでなく、その政変を経て3年後に大統領の座に就く元陸軍大佐グティエレスの政権成立を支えることにもなった。パチャクティック運動は2003年にグティエレス政権と連携し、先住民の政治家2名（パカリ外相とマカス農牧相）が入閣した。しかし、大統領が選挙公約に反してネオリベラル路線を一層強める傾向をみせたため、与党連合のきしみが表面化し、7ヶ月後の2003年8月に両者の連合は瓦解した。

先住民運動にとって、グティエレス政権参画の経験は危険をも伴う政治的決断であった。同政権による分断と抱込みに揺さぶられて勢力を弱めたばかりか、2005年のグティエレス失脚に巻き込まれて、威信を低下させざるをえなかった。自己反省とともに、新たな戦略の建直しを求められる状況となった。

こうした負の経験が影響して、先住民運動はその後中央政府との関係には慎重な姿勢を見せる。この後、2007年1月に成立したコレア政権に対しても一定の距離を置くようになる。先住民組織の主張の多くは同政権と共通していたが、新政権との協力には慎重な姿勢を見せたからである。左派言説にもかかわらず現実路線に近い政策運営をとり、ネオリベリズムとの共存も辞さないコレア政権と、先住民組織をはじめとする社会運動・市民運動との乖離が生じている。

## 2) 先住民の可視化

このような1990年代以降における先住民運動の活発化は、先住民という集団と個人、およびそのカテゴリーの可視化をもたらした。可視化の様態にはいくつかの側面がある。

まず、集団としての先住民の存在が国政にせり出したことで、プラス・マイナスの両面を交え、先住民のイメージに変化の兆しや揺れ動きが生じた。1990年の先住民による全国蜂起を境にして、エクアドル、とくに首都キトを中心とするアンデス高地部では、先住民が大挙して都市部に押しかけてくる、権力を奪取して自民族中心の政治を行なう、といった恐怖を交えた言説や観念が、都市部の白人混血層の間で広まったという（Endara1998）。もちろん、その後先住民運動が政府との交渉を経て社会運動を主導していくと、先住民の政治家や運動家に民主的改革を期待する声も出てくるようになった。

先住民運動はやがて、民族としての独自性をマイノリティの諸権利（前述の16項目など）として要求するだけでなく、他の社会構成員との共通性を意識して、市民的諸権利を要求するようになる。すなわち、市民権（シティズンシップ）の問題を提起してくるのである。1990年の先住民蜂起を境にして「客体としての先住民からエスニックな市民へ」（De sujetos indios a ciudadanos étnicos）の転換が生じていったという見解（Guerrero2000, pp.105-109）が説得力をもつ。しかも先住民組織は、先住民による政治動員や蜂起が「先住民のためだけでなく」（Nada sólo para los Indios）<sup>(注12)</sup> 社会全体のためであると訴えて、他の社会運動・市民勢力との連携にことさら配慮するようになる。

先住民などマイノリティの可視化については後でさらに検討する。

## 3. 先住民と憲法改正：公定多文化主義による国民統合

### 1) 1998年憲法

1998年8月に制憲議会は1978年憲法の修正を可決した。重要な成果は、エクアドルが多文化多民族国家（estado...pluricultural y multiétnico）であるという宣言が憲法に盛り込まれたことだった。つまり、先住民および黒人／アフロ系という様々な民族の存在と権利とを明示しつつ、国家の多民族性と多文化性（多元的な「国民」と「文化」の存在）が公認されたのである（1998年憲法の前文、第62条、第83-85条など）。実際、新憲法には15項目に及んで先住民とアフロ系住民の集団的諸権利が盛り込まれ、

それらの集団の諸権限と慣習法が承認されている。

先住民にとって「集合的諸権利」や「多民族性」が容認されたことは大きな意味がある。従来の民主主義の概念が均質的な国民（とくにメスティソ）や個人的諸権利を想定していたのにくらべ、それを補完する概念が定められたからだ。メスティサヘがナショナル・イデオロギーとされ、マイノリティの不可視化が常態となってきた社会では、そのような単一の指標が法的に止揚されたことは重要な成果といえた。

この頃から CONAIE は、先住民集団を表わすカテゴリーとして「ナショナルリダー *nacionalidad*」<sup>(注13)</sup> という表現を使用し始めるようになる（CONAIE 1989）。第一義的に「エトノス」でも「プエブロ」でもなくナショナルリダーと名乗っているところに、国民国家が含意する「ナシオン（*nación*）」に対抗しつつ、民族の独自性を主張しようとする意図が読み取れる。実際、CONAIE をはじめとするいくつかの先住民諸組織のスペイン語名称には「先住民ナショナルリダー（複数）*nacionalidades indígenas*」の連合体だとのメッセージが込められており、その見解によれば、エクアドル社会における先住民の総体は、まずナショナルリダー、次にプエブロという2段階の集団から構成される。ナショナルリダーとは主として言語文化の独自性に応じた先住民の区分であり、アマゾン低地および海岸部の2地域ではそれぞれ複数の区分があるが、アンデス高地ではキチュア<sup>(注14)</sup>としてひとまとまりにされる。合計で14のナショナルリダーが数えられる。そして後者のプエブロとしては、ナショナルリダーの1つであるアンデス・キチュアが、言語文化的には類縁となるオタバロ、カニヤリ、サラサカなどの12に及ぶプエブロに下位区分されている。

現実には、1998年憲法では「プエブロス・インディヘナス（*pueblos indígenas*）」という表記が採用され、ナショナルリダーという表現は先住民（組織）による自己規定とされるにとどまったが、次にみるように10年後になると、2008年憲法におけるマルチナシオナル（マルチナショナル）という複数民族の存在を規定する表現につながってくる。

## 2) 2008年憲法

エクアドルではコレア現政権のもと、2008年の国民投票で新憲法が承認された。1998年憲法の改正であり、これにより、エクアドルが「異文化共生・多文化の国家」（*estado...intercultural y pluricultural*）であるという表現が盛り込まれた。そして、1998年憲法にあった「*multiétnico*」をいう表現が消え、「*intercultural*」という表現が採用されている<sup>(注15)</sup>。

また言語面でも重要な変化がみられた。関係言語（公用語の意）としてのスペイン語と並んで、キチュア語とシュアール語（アマゾン地域の先住民語）も「文化間の関係言語」とであると定められた。実際、同憲法の第2条には「スペイン語は公式言語である。キチュア語、シュアール語、その他の祖先に由来する諸言語は、先住民にとって公的使用のものである」と書かれている。

他のラテンアメリカ諸国と同様に、エクアドルでも中央政府による先住民の二言語教育は、国民統合の手段とされてきた<sup>(注16)</sup>。しかし、1980年代以降は、民族および文化の多元性を尊重する傾向が世界的に強まり、エクアドルでも多文化主義が尊重されつつある。そして1990年代以降は、先住民の政治文化運動からの要求もあり、エクアドルを含むラテンアメリカ諸国では、憲法改正だけでなく教育改革においても多文化主義や「異文化間性」（*interculturalidad*）への配慮が盛り込まれるようになっていく。

その代表的政策が1992年に開始された公教育改革であり、基礎教育のためのカリキュラム改革につながった。1996年には基礎教育課程に「異文化間性」の概念が導入され、同時に、教科書の記述にも配慮が加えられた。もっとも、それらの新しい教科書を分析した研究によれば、民族集団間のポストコロニアルな権力関係（植民地時代以降も継続する異文化間の上限関係）は容易には変化せず、教科書の記述にも社会の多文化性への配慮は十分とはいえず、学習者に多文化主義の批判的理解を促すには至っ

ていない。

こうした流れのなかで、かつてのメスティサへに基づく民族文化関係の論理は変容しつつあるかにみえる。しかし同時に、多文化主義の公式化を通じて国民文化の多元性が前面に打ち出されるにつれて、多様な民族文化の独自性を主張することがかえって難しくなるという逆説も生まれた。つまり、「異文化間性」の承認や制度化が反面で、民族文化面の差異をめぐる主張を希薄化させ、マイノリティによる抵抗や復権運動の根拠を侵食してしまうこともあるからだ。

エクアドルの2008年憲法ではマルチエスニック（スペイン語で *multiétnico*）という表記は消え、マルチナショナル（同じく *multinacional*）という表現が採用された（ナショナルというのは前述のナショナルリダーに基づく）。また、「異文化間性」（*intercultural*）という表現が多用され、*interculturalidad* という概念に基づく文化・民族概念が表明されている。ここで重要な変化は、多文化主義の表現が *multiculturalidad* から *interculturalidad* へと変更されたというレベルにとどまらない。そこには、ラテンアメリカでも隆盛しつつあるカルチュラス・スタディーズに関わる文化間の関係性の転換が見い出される。つまり、概念の転換にはポストコロニアルな問題提起が含意されており、先住民運動は、上からの *multiculturalidad* という概念が多文化の共存を謳いながら国家による包摂や統合を前提とすることに反発し、むしろポストコロニアリズムの観点から、文化間の力関係を再編しつつ社会文化の変革を志向する *interculturalidad* の方を積極的に主張している。

### 3) 多様性のなかの統一：公定多文化主義による新たな国民統合の手段として

1990年代半ばから先住民運動は、「多様性のなかの統一」（*Unidad en la diversidad*）というスローガンを表明するようになった（山本 2005, pp. 49-61）。そして、国民統合を促すとの意図から、エクアドル政府も「多様性のなかの統一」を受けとめ、利用するようになる。複数文化の存在や並存は認めつつも、それらが国民的まとまりを破壊させることなく、「国民文化」という大きなまとまりのなかにとどまることを求めていくのである。

前述のように、1990年代から現在にかけて、他のラテンアメリカ諸国と同様、エクアドルでは国民統合の原理や民主主義の中身に一定の転換を迫る状況が生まれた。一方で、従来のようなメスティサへに代わり、人種民族・文化言語などの多様性を認める方向へと、国家の指針が変更されたのである。同時に他方では、憲法改正にともなう多文化・多民族性の明記は、同時にその行き過ぎを抑制する反作用を内包していったといえる。それは国家による上からの多文化主義、いわば「公定の」「形式的な」多文化主義であり、その許容を通じて、多様性の遠心力を統一という凝集力につなぎ止めようとしたのである。

したがって、法的な変更が「多民族国家」の実現に直結するわけではないことも自明であろう。「公定多文化主義」のもとでは、社会生活における先住民への差別や抑圧の構造、それを容認かつ助長する主流社会の意識はたやすく変わることは想定しがたい。先住民やアフロ系住民などのマイノリティを社会に取り込むことで、差別や格差構造の改善がかえってなおざりにされていく面も否定できないからだ。このような意識から、先住民などは、むしろ国家機関を利用するというしたたかな戦略に進んでいくことになる。

### 4) 先住民による国家機関の利用

これまでの論点に接続する形で、ここでは、先住民運動（やアフロ系運動）が国家・政府機関への働きかけを通じて、国家の利用を進めてきた状況を概観する。先住民などマイノリティの組織は、国家に利用されたり搾取されるという受け身の姿勢から、積極的に独自の組織化や利益追及をはかり、そのためには国家機関の利用をためらわない姿勢が明らかとなっている。それは公定多文化主義という新たな

国民統合の指向に対する反応であり、公的空間への参加を通じて、国家とのせめぎ合いの過程を生み出している。先住民組織のそうした姿勢や状況は言語教育や文化面、それに開発面でも顕著である。後述するように、人口センサスなどの統計調査への積極的な参加もまた、公的空間の利用による集団的利益の追求であり、それらが「民族の可視化」につながっているのが（エクアドルのみならずラテンアメリカ各国に共通する）近年の傾向である。

紙幅の関係で詳細は省略するが、先住民運動のイニシアティブによって設立した組織や制度として次のような多様な組織を列挙できる。

- ・先住民文化学術研究所 ICCI (Instituto Científico de Culturas Indígenas) (1986年設立)
- ・異文化間二言語教育局 DINEIB (Dirección Nacional de Educación Intercultural Bilingüe) (教育文化省内に設置され、1988年より先住民への二言語教育を中心とする「異文化間二言語教育」(EBI)を開始)
- ・エクアドル先住民開発審議会 CONDENPE (Consejo de Desarrollo de las nacionalidades y pueblos del Ecuador) (1998年設立、大統領府に所属する政府機関)
- ・先住民異文化間大学 (Universidad Intercultural de las Nacionalidades y Pueblos Indígenas, Amawtay Wasi) (2004年設立)

他方、アフロ系運動でも同様の動きがみられ、先住民運動とアフロ系の運動には密接な関係があり、運動において先行する先住民のイニシアティブが、アフロ系にも影響を与えてきた。アフロ系もまたアフロ系エクアドル開発審議会 CODAE (Corporación de Desarrollo Afroecuatoriano、大統領府に所属する政府機関)を設立し、市民的および集団的諸権利を推進している。そして、CONDENPEとCODAE、つまり先住民とアフロ系の相互協力で、1998年にはエクアドル先住民・アフロ系開発プロジェクト PRODEPINE (Proyecto de Desarrollo de los Pueblos Indígenas y Negros del Ecuador)の実施が開始された。これは、(1998年憲法に盛り込まれた諸要求とともに)先住民組織が中央政府に要求していたものであり、世界銀行やエクアドル政府からの資金援助をもとに開発プロジェクトが進められてきた。

#### 4. 先住民の包摂と排除：人口センサスにみる人種・民族意識

ここでは、人口センサスを取り上げ、その結果に現れた人種・民族意識に着目して、メスティサへの現状や先住民の位置づけを考察する。

まず、それ以前の状況をふり返ると、1950年11月に実施されたエクアドルで最初の全国レベルの人口センサスにおいては、先住民を含む住民すべてが調査の対象とされたが、しかし、エスニックな側面つまり人種民族面については調査項目には加えられていなかった。そのセンサスは人種民族やエスニシティを不問にすることで、「先住民を認識すると同時に隠蔽し」、かつ「先住民の存在を肯定すると同時に否定する」ことになっており、そこには当時の社会に根強いメスティサへの意識が反映していたと指摘される (Clark2008, pp. 150–151, 158, 160, 163–166)。

その後何度か実施された人口センサスでも、先住民などマイノリティの存在に対しては曖昧な対応がとられ、メスティソ国家の意識から、人種民族面の事項が調査項目とされることはなかった。そうした状況が変化するのは、先住民などの可視化や多文化・多民族の存在が国家レベルでも認識される21世紀初頭の人口センサスを俟たねばならなかった。

##### 1) 2001年の人口センサス

2001年11月にエクアドルでは第5回人口センサスが実施され、初めて「言語」と「自己認識」の両

方に関する質問が盛り込まれた (INEC 2001)<sup>(注17)</sup>。先住民のアイデンティティに基づいてエスニック的変数を公式統計に導入する試みは、まず 1990 年の人口センサスで「家庭で使う言語 (el idioma que se habla en el hogar)」を基準として実施されていたが、これに対し 2001 年の人口センサスでは、「話す言語による自己認識 (Autoidentificación)」が基準にされたのであった。

「あなたが話す言語はどれですか？」という問いかけがなされた。回答の選択肢は「スペイン語のみ」「ネイティブ言語のみ」「外国語のみ」「スペイン語とネイティブ言語」「その他」の 5 つであるが、2 番目と 4 番目の設問に回答する場合にだけネイティブ言語の名称の記述回答が要求された。

また、「あなたはどのように自己認識しますか？」という問いでは、「インディヘナ (先住民)」、「黒人 (アフロ系エクアドル)」、「メスティソ」、「ムラート (先住民と黒人の混血)」、「白人」、「その他」という 6 つの人種民族カテゴリーからの選択が求められた<sup>(注18)</sup>。そして、「インディヘナ」と回答する者にはさらに、「どの先住民のナショナルリーダーないしプエブロに属しますか？」<sup>(注19)</sup> という記述を求められた。

集計の結果 (全人口 = 1215 万 6608 人) をみると、人種民族分類とその数は「インディヘナ」83 万 418 人 (6.8%)、「黒人」27 万 1372 人 (2.2%)、「メスティソ」941 万 1890 人 (77.4%)、「ムラート」33 万 2637 人 (2.7%)、「白人」127 万 1051 人 (10.5%)、および「その他」3 万 9240 人 (0.3%) となっている。特筆すべきことに、メスティソと白人の合計で 88% を占めており、そこには「エクアドルは白人メスティソ社会だ」というかつての人種民族イデオロギーを追認するような結果が導き出されていることがわかる。

統計の手法自体にはいくつも問題があることが指摘されているが、それを度外視しても、人種民族的な偏見は人口統計に反映し、黒人や先住民よりも混血 (メスティソ) や白人として自己申告する者が多くなる傾向が顕著となっている。先住民の重みが大いエクアドルで、その「国民」がメスティソへのイデオロギー (白色化の願望) を内面化していることが、統計結果からも明らかであるといえよう。

## 2) CONEPIA 結成および 2010 年の人口センサスへの参加

このような 2001 年の人口センサスの手法や結果、とくに背景にあるイデオロギーに対しては、さまざまな批判が出されることになった。

2001 年センサスの結果を受けて、エクアドルでは、国内にどのくらいの先住民が居住するかについて激しい議論が開始された。公式統計では約 7%、先住民組織によれば最大で 40% という数字も挙げられており<sup>(注20)</sup>、数値の隔たりは大い (CONEPIA 2008)。

こうして 2007 年に先住民諸組織は、INEC (エクアドル国家統計局)、CODAE, SENPLADES (国家企画局)、FLACSO (ラテンアメリカ社会科学研究所)、UNFPA (UNPF, 国連人口基金) など、公式統計の情報を生産および/ないし利用する諸機関との間で、統計データをめぐる対話の過程を開始している。その結果、CONEPIA 先住民とアフロ系エクアドルのための全国統計委員会 (Comisión Nacional de Estadísticas para los Pueblos Indígena y Afroecuatoriano) が結成された (CONEPIA 2008)。CONEPIA は、人種主義と社会的・制度的な排除の解消を目指して、マイノリティである先住民とアフロ系住民の実態 (人口規模、居住地域、社会状況など) を明らかにすることで、「エクアドルにおける差異化された統計情報の生産を制度化すること、および先住民とアフロ系住民の自己認定のエンパワーメントを促すこと」<sup>(注21)</sup> を目的にしている。

後述するように、人口センサスと同じ 2001 年以降、メスティソの内部から立ち上がってきた民族集団であるモンツビオも、この CONEPIA に加わるようになったため、CONEPIA という略称は同じながら「先住民、アフロ系エクアドル、およびモンツビオのための全国統計委員会」<sup>(注22)</sup> へと名称が変更されている。

その後、CONEPIAを軸にして公的な調査統計への参加を呼びかけるキャンペーンが展開されることになった。そして、コリア政権のもとでも調整が続けられた結果、2001年の人口センサスから9年後、2010年11月に第6回人口センサスが実施されるに至っている。2011年8月現在も調整中として同センサスに関わる人種民族別の統計データは公表されていないものの、2010年の人口センサスでは次の点が注目される。すなわち、自己認識を問う項目において選択肢が「インディヘナ」、「アフロ系エクアドル／アフロ系の子孫」、「黒人」「ムラート」「モントゥビオ」「メスティソ」「白人」、「その他」という8つの人種民族カテゴリー<sup>(注23)</sup>へと変更されて、モントゥビオが新たに加えられたほか、いささか奇妙にも思われるがアフロエクアドルと黒人へのカテゴリー細分化も行なわれている。

このように、先住民やアフロ系住民などのマイノリティ集団は近年、公的空間への参加や公式統計における「民族の可視化」を通じて、自己のアイデンティティや文化の構築をはかりつつ、教育等の振興も交えた市民的諸権利の獲得や貧困・差別の解消、さらには開発資金の獲得にも乗り出している。その同時代的状況として、次にみるようにメスティソの内部からも新たな動きが浮上してきた。

## 5. 新しい混血民族の創生：多様性化するメスティソ

### 1) メスティサへの変容、メスティソの多様性

メスティソというカテゴリーは、「すべてを包摂する排除のイデオロギー」といわれるように、先住民やアフロ系住民という他のカテゴリーとの対比では、ひとつの確固とした実体であるかのように扱われる。無条件に均質性が前提とされるか、強調されてきたからであり、メスティソの中身が問われることはほとんどなかった。しかし、メスティソの内部にはいくつかの多様性があると考えるのは自然であり、実際の社会でも、時としてそのようにふるまわれている。

他方で、メスティソを中心とする混血層の内部における多様性については、従来あまり注意が払われてこなかったが、近年では、エクアドルの人種民族状況に関してもいくらかの分析がなされつつある。すなわち、人種主義、とくに人種偏見や人種差別は従来、先住民やアフロ系住民に対する白人系住民やメスティソの意識として問題視されてきた。それに加え、近年では、メスティソという広範な社会層の内部における人種偏見・差別もまた顕在化してきている。すなわち、同質的な存在として曖昧に捉えられていたメスティソの中にも、ロンゴ (longo) のように、偏見のまなざしを注がれる社会層が存在していることに、目が向けられ始めたのである。

### 2) 「モントゥビオ」：新たな混血民族の創生

近年のエクアドルでは、「モントゥビオ」(montubio)と自称する混血集団が、メスティソに分類される「混血層」の中から、新たな民族として自己主張し始めている。モントゥビオによる民族創生の運動は、先住民運動から刺激を受け、それと同様に、民族の自己主張を「本質主義的な戦略」として展開してきたのである<sup>(注24)</sup>。その結果2001年、ノボア政権下で、ストライキによる対政府要求を貫く形で、モントゥビオはエクアドルのエスニック・アイデンティティの1つとして認められ、モントゥビオの組織CODEPMOC(エクアドル海岸部・沿岸部熱帯地域モントゥビオ民族開発審議会)が中央政府から公的承認を受けている。このようにモントゥビオは、最近になって、メスティサへのなかから表面化し実体化した民族アイデンティティである。それは、メスティソの内的多様性を示す現象だというだけでなく、新たな混血民族の創生を意味する事例でもあると意義づけることができよう。

## おわりに

メスティサへは言説であると同時に実践でもある。そのなかで、同質性と多様性（差異）が相互の緊張をはらみつつ共存する。一見すると、混血性という同質化の力学は、いまや多様性の力学に取って代わられたかのようだ。民族文化の差異が強調され、異文化間性という複数の民族文化にかかわる関係性が中心議題となっており、その趨勢は不変と思われるからだ。しかし、そうした移行の過程は直線的ではない。むしろ複雑的、さもなければ同時並行的と言うべきかもしれない。多文化主義がもてはやされながら、人々の意識には混血という単一の民族文化への憧憬が、ずっしりと根を下ろしていることも否定できない。

本論では、現代のエクアドル社会における人種・民族状況がはらむ特徴と問題点を、主として先住民をめぐる状況との関連で検討してきた。過去 20 年間に於いて活発化し深化してきた先住民の組織的運動が、マイノリティをめぐるエクアドル内外の環境変化とも相まって、多文化主義・多民族国家への道筋をつけることに大きな影響を与えている。そして、社会の多元性（先住民やアフロ系住民を含む多民族性・多文化性）が公認され、先住民などの民族的・市民的な諸権利が認められた。

また逆説的ながら、人口センサスにみる公式統計では、その上でもなお、メスティサへという 20 世紀前半以来の混血思想が、社会の成員＝国民に内面化されたイデオロギーとなっている状況も確認された。

同時に、メスティソの内部から新たな混血民族が創生されつつある現状からは、多文化・多民族状況が静的ではなく、さまざまな集団の拮抗と共生の相互作用によって織り成されているダイナミックな過程であることがうかがわれる。こうしたメスティソの再編という状況は、他のマイノリティ集団、とりわけ先住民の運動に刺激を受けて表面化してきたことは間違いない。民族集団の境界は曖昧かつ強固な壁であると同時に、相互浸透性も兼ねそなえている。

このような現状にあって、グローバル化の時代の国家は、新たな形の国民統合を通じて先住民などのマイノリティを取り込もうとしているかに見える。もはや「民族の可視化」は逆行できない流れになっており、逆にいえば、だからこそ先住民などの側でも、政府機関や公式統計という公的空間への参加を通じて、政治参加の進展や社会参加の増進、さらに社会経済的および文化的な条件の改善を模索しているのである。

この意味で、21 世紀になっても相変わらず政治経済の不安定が続くエクアドルにおいて、包摂と排除の力学にさらされつつも、それに抗いながら独自の取り組みを続ける先住民などの組織的運動は、限界とともに可能性をも秘めた実践として注目に値するのであろう。

## 注

- (1) メスティソとして、先住民だけでなく黒人の血も含んだ混血者を意味することもある。
- (2) 上記注 1 の状況にもかかわらず、多くの場合、メスティサへにおいてアフロ系住民は「見えざる存在」となってきた。
- (3) アフロ系住民とその運動については、とりあえず新木 2009b を参照。
- (4) スペイン語の原語では「tributo de indios」(Guerrero2000) および「tributo indígena」(Ibarra1998) という 2 つの表記が使われている。
- (5) ブラジルでは 1930 年代以降、ジルベルト・フレイレによる混血思想が大きな影響を及ぼし、その後の 20 世紀前半に、人種関係が温和なブラジル社会では人種主義は存在しないとする「人種デモク

ラシー」が主張されることになった。

- (6) ロイトマンは著書で、アフロ系エクアドル人を「見えざる市民 (Invisible Citizens)」と書いている (Roitman2009, pp. 108–112)
- (7) ホミ・バーバは著書『文化の場所』において、「わたし／われわれ」と「あなた／あなたたち」の間の「差異空間」を、境界の間隙である「第三の空間」と呼び、それを積極的に創造的な空間として作っていくことにより、同質化が不可能で差異の協定が可能となるような新しい混成の転換的なアイデンティティ、すなわち「ハイブリッド性 (混成性) のアイデンティティ」が創出されるとしている。
- (8) 最初の先住民組織となったのは、1944年に設立されたエクアドル先住民連盟 (Federación Ecuatoriana de Indios) である。
- (9) CONAIE については、[新木 2004] を参照。
- (10) パチャクティック運動については、アンデス諸国に出現してきたエスニック政党 (ないし先住民政党) の範疇に含めた研究が行なわれている。詳細は [Van Cott 2005] を参照。
- (11) 政治変動の過程の詳細については、[新木 2009a] を参照。
- (12) これは、2001年の先住民蜂起の際に叫ばれたスローガンである。
- (13) 英語で表記すればナショナリティ **nationality** となる。
- (14) キチュアとはアンデスとアマゾンにまたがる先住民集団であるとともに、言語名称でもある。キチュア語はペルーなどでは広くケチュア語といわれるが、エクアドル国内では一般にキチュア語と呼ばれる。先住民で最大規模の人口を擁するキチュアは、先住民運動の主体を担う点でも注目される。
- (15) 2008年憲法の内容については、[新木 2009c] を参照。同憲法は大統領の連続再選、大統領および行政権の権限強化などを盛り込み、コリア政権の長期化に道を開いた。また先住民の文化や生活、開発に関わる内容、それも世界的にも先進的な内容がいくつか盛り込まれた。要点を列挙すれば次のとおりである。
  - ・「Buen vivir (よき生き方・よき生活)」: キチュア語の **sumak kawsay** という先住民文化による概念であり、多様性や調和に基づく自然と人間生活の共存を意味する。そして、「よき生き方の権利」として水、食糧、環境、情報をめぐる権利も記される。
  - ・「自然の権利」: 先住民の世界観と関連し、環境配慮が自然の法人格化として規定される。
  - ・「先住民の権利」: 様々な規定があるほか、先住民の司法制度についても定められる。
- (16) 先住民の二言語教育については、[新木 2009d] を参照。
- (17) 2001年の人口センサスに関する分析は、[Guerrero 2005] と [León 2003] を参照。
- (18) スペイン語による質問は次のとおりである。¿Cómo se considera: Indígena, Negro (Afroecuatoriano), Mestizo, Mulato, Blanco u Otro?
- (19) スペイン語による質問は次のとおりである。¿A qué Nacionalidad Indígena o Pueblo Indígena pertenece?
- (20) CONAIE は、先住民の総数を 311 万 1900 名 (全人口の 25.6%) と推計している。
- (21) [CONEPIA 2008] に よれ ば、Institucionar la producción de información estadística diferenciada en el Ecuador y estimular el empoderamiento de la autoidentificación de los pueblos indígenas y afroecuatorianos と表現されている。
- (22) 新たなスペイン語名は次のとおりである。Comisión Nacional de Estadísticas para los Pueblos Indígena, Afroecuatoriano y Montubio
- (23) スペイン語による質問は次のとおりである。¿Cómo se identifica (.....) según su cultura y costumbres: Indígena, Afroecuatoriano/a o Afrodescendientes, Negro/a, Mulato/a, Montubio/a, Mestizo/a, Blanco/a u Otro/a? なお、日本語訳には表れないが、それぞれの名詞には女性形語尾も併

記されてジェンダーへの配慮がなされている。

(24) モントゥビオによる民族創生の状況についての詳細は, [Roitman 2008] および [Roitman 2009] を参照。

#### 〈参考文献〉

- 新木秀和 (2004) 「組織論からみた先住民運動—エクアドル先住民連盟 (CONAIE) の事例」 南山大学ラテンアメリカ研究センター編 『ラテンアメリカの諸相と展望』 行路社
- (2005) 「政治参加から社会変革へ—エクアドル先住民の挑戦」 藤岡美恵子・中野憲志編 『グローバル化に抵抗するラテンアメリカの先住民』 現代企画室
- (2009a) 「エクアドルの政治変動と社会運動—政変の比較分析から」 村上勇介・遅野井茂雄編 『現代アンデス諸国の政治変動—ガバナビリティの模索』 明石書店
- (2009b) 「エクアドルのエスニック運動と多文化主義—先住民運動とアフロ系運動を中心に」 『グローバル化時代の多文化主義と社会運動』 文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 B 海外学術調査) 研究成果報告書 (研究代表者: 鈴木茂)
- (2009c) 「エクアドル 2008 年憲法の概要」 『ラテンアメリカ・カリブ研究』 第 16 号, つくばラテンアメリカ・カリブ研究会
- (2009d) 「エクアドルの言語政策と二言語教育の実践」 山崎眞次・畑恵子編 『ラテンアメリカ世界のことばと文化』 成文堂
- 大貫良夫 (1984) 「メスティソの誕生」 大貫良夫編 『民族交錯のアメリカ大陸』 山川出版社
- 山本誠 (2005) 「昂揚するエクアドル先住民運動—「多様性の中の統一」をめざして」 『四天王寺国際仏教大学紀要』 第 40 号
- Clark, Kim (2008), “Raza, ‘cultura’ y mestizaje en el primer censo de Ecuador” en Marisol de la Cadena (ed.), *Formaciones de indianidad. Articulaciones raciales, mestizaje y nación en América Latina*. Bogotá—Lima: Envián, pp.149-171.
- CONAIE (1989), *Las nacionalidades indígenas en el Ecuador: nuestro proceso organizativo*. Quito: TINCUI, Abya-Yala.
- CONEPIA (2008), “Estadísticas diferenciadas para los Pueblos Indígenas del Ecuador.” (PDF) Quito: CONEPIA.
- De la Torre, Carlos (1996), *El racismo en Ecuador: Experiencias de los indios de clase media*. Quito: CAAP.
- Endara, Lourdes (1998), *El marciano de la esquina: Imagen del indio en la prensa ecuatoriana durante el levantamiento de 1990*. Quito: Abya-Yala.
- Guerreo, Andres (1994), “Una imagen ventrílocua: El discurso liberal de la ‘desgraciada raza indígena’ a fines de l siglo XIX” en Blanca Muratorio (ed.), *Imágenes e imaginarios: Representaciones de los indios ecuatorianos. Siglos XIX y XX*. Quito: FLACSO.
- (2000), “La desintegración de la administración étnica” en Varios autores, *Sismo étnico el el Ecuador: Varias perspectivas*. Quito: CEDIME, Abya-Yala.
- Guerrero C., Fernando (2005), “Población Indígena y Afroecuatoriana en el Ecuador a partir de la información censal de 2001” en *Pueblos indígenas y afrodescendientes de América Latina y el Caribe: relevancia y pertinencia de la información sociodemográfica para políticas y programas*. Santiago de Chile: UNDP.
- Ibarra, Hernán (1998), “El laberinto del mestizaje” en Hernán Ibarra, *La otra cultura: imaginarios*,

- mestizaje y modernización*. Quito: Abya-Yala, MARKA.
- INEC (Instituto Nacional de Estadística y Censos) (2001), *VI Censo de Población y V de Vivienda, noviembre de 2001: Población que se declaró indígena*. Quito: INEC-República del Ecuador.
- León, Mauricio (2003), "Etnicidad y exclusión en el Ecuador: Una mirada a partir del Censo de población del 2001" *Iconos. Revista de Ciencias Sociales*, No.17 (FLACSO-Ecuador), pp.116-132.
- Moreno Yáñez, Segundo y José Figueroa (1992), *El levantamiento indígena del Inti Raymi de 1990*. Quito: Abya-Yala.
- Polo Bonilla, Rafael (2002), *Los intelectuales y la narrativa mestiza en el Ecuador*. Quito: Universidad Andina Simón Bolívar, Abya-Yala, Corporación Editora Nacional.
- Roitman, Karem (2008) "Hybridity, Mestizaje and Montubios in Ecuador" QEH Working Paper No.165 March, pp.1-20.
- (2009) *Race, Ethnicity, and Power in Ecuador: The Manipulation of Mestizaje*. Boulder and London: First Forum Press.
- Siva, Erika (1995) *Los mitos de la ecuatorianidad: ensayo sobre la identidad nacional*. Quito: Abya-Yala.
- Stutzman, Ronald (1981), "El mestizaje: An all-inclusive ideology of exclusion" in Norman E. Whitten Jr. (ed.), *Cultural Transformation and Ethnicity in Modern Ecuador*. Urbana: University of Illinois Press.
- Van Cott, Donna Lee (2005), *From Movements to Parties in Latin America: The Evolution of Ethnic Politics*. New York: Cambridge University Press.

(追記)

本稿は、平成22～24年度科学研究費補助金（基礎研究B 海外学術調査）、研究課題「グローバル化時代における南北アメリカの国家・市民社会・社会運動」（課題番号：22401009／研究代表者：東京外国語大学教授 鈴木茂）の助成による研究成果の一部である。